

聖書世界の美粧

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国際日本文化研究センター 平松隆円

MAKEUP SEEN IN THE BIBLE

Ryuen HIRAMATSU, B.Ed., M.A.

Special Research Student / Collaborative Researcher

National Institutes for the Humanities, International Research Center for Japanese Studies, Kyoto JAPAN

ABSTRACT

The Bible is a model of faith and life for people believing Christianity. The Bible affects their everyday life in conjunction with outlook on ethic and morality of people believing in Christianity only as a doctrine in religion. Influence to beauty, which the Bible gives, is big.

It is said that the modns vivendi that is scrupulousness is considered to be a model historically in Christianity society. Christianity catches that people decorate beautifully is a big crime, and thought that to be with a natural figure good is the main-

stream. Most of the clear negation and criticism of makeup are not found in the Bible. We can confirm a description at the urging of makeup from an act of God oneself and words of Jesus. It is deep, that criticism to makeup of Christianity society is tied to sex life of Christianity clergymen not a thing grounds in the Bible.

Keywords : Christianity, the Bible, beauty, makeup, sex life

抄録

聖書は、キリスト教を信ずる人々にとっての信仰と生活の規範のよりどころである。すなわち、聖書はたんなる宗教上の教義としてだけでなく、キリスト教を信仰する人々の倫理観や道徳観と関連し、彼らの日常生活に影響を与えている。それは美粧に対しても例外ではなく、特に聖書が与える化粧への影響は大きい。

歴史的にキリスト教社会では、謹直な生活態度が規範とされてきたといわれる。すなわち、化粧などで美しく身を飾ることを大きな罪としてとらえ、自然のままの姿でいることを善とす

る思想が主流をなしている。にもかかわらず、聖書には化粧の明確な否定や批判はほとんど見当たらない。しかし、化粧を勧める記述は神自身の行為、そしてイエスの言葉から確認できる。

キリスト教社会の化粧への批判・否定は、聖書に根拠をおくものではなく、キリスト教聖職者の性生活と深く結びついているのである。

キーワード : キリスト教、聖書、美粧、化粧、性風俗

1. はじめに

聖書はキリスト教の経典として、またユダヤ教やイスラム教などの経典の一部として、それぞれの宗教に影響を与えている。特にキリスト教では、聖書は神の言葉であり、聖書が書かれた目的は「あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである（ヨハネ20：31）」とされる。

聖書は、一つの物語からなる書物ではなく、有名な創世記「初めに、神は天地を創造された（創世記1：1）」という天地創造の物語から始まり、ヨハネの黙示録「主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように（ヨハネの黙示録22：21）」で終わる旧約聖書39巻と新約聖書27巻の全66巻から構成される書物である。旧約聖書の世界はエジプト・シリア・メソポタミアなど古代オリエント文化に属し、ヘブル語で書かれ、新約聖書の世界は、ローマ帝国に支配されたギリシア・マケドニア・ローマなど地中海文化に属し、主にギリシア語で書かれているなど、聖書は多くの異なる時代や地域に生きた著者たちによって書かれ、何世紀にもわたり編纂されている。しかしながら、聖書の各物語にはある共通の主題が存在している。すなわち、「神が人類の救いを計画し、その救いをキリストにおいて実現した」である。なお、旧約・新約とは、モーセを介した神と人類との「古い」契約とイエスを介した神と人類との「新しい」契約を意味している。そのため、聖書はキリスト教を信ずる人々にとっての信仰と生活の規範のよりどころとして、たんに宗教上の教義としてだけではなく、人々の倫理観・道徳観と関連し、日常生活に影響を与えることとなる。そして、それは美粧に対しても例外ではなく、特に聖書のキリスト教社会の化粧への影響は大きい。

では、化粧はキリスト教社会でどのように扱われてきたのだろうか。

本研究では、聖書を概観することでキリスト教社会における化粧との関わりを考察する。

2. 聖書世界の化粧観

歴史的にキリスト教社会では、慎ましく謹直な生活態度が規範とされてきたといわれる。すなわち、化粧などで美しく身を飾ることを大きな罪としてとらえ、自然のままの姿であることを善とする思想がキリスト教社会の主流をなしている。キリスト教社会での化粧についての見解の歴史を、リチャード・コーソンの『メイクアップの歴史』に依拠してまとめたい。

【化粧の否定】

紀元3世紀から4世紀頃、カルタゴの神学者テルトゥリアヌス¹⁾は「肌を薬物で痛めつけ、頬を紅で汚し、目を黒く隈取る女は神に逆らう者。自然物は神の御業であり、人工物は悪魔の仕業」と批判し、アレキサンドリアのクレメンヌス²⁾は「かつらを被ったまま神の祝福を祈ると、神の祝福はかつらにとどまり、かつらを被った人まで浸透しない」と批判する。また、聖シプリリアヌス³⁾は「悪魔たちが眉を彩り、頬に偽りの紅をさし、さらに髪の毛の自然な色を変え、頭や顔全体の外観を変えてしまう方法を最初に教えた。神が造られたものを、作り変えたり直したりできようか。それは完璧に仕上げられたものを作り変えたり直したりして、神に暴力を加えること以外の何物でもない。自然は神の創造物であり、人工物は悪魔が造ったものであることを彼女たちは知らないのか」と批判し、ミラノの司教アンブロシウス⁴⁾は「化粧をすることは詐欺行為である。化粧は人をだまし、惑わし、人を喜ばすことはできない。そして神をも不愉快にする。神の造られた顔を捨て、売春婦のような顔にしてはならない」と批判し、聖ヒロニムス⁵⁾は「女性たちは鏡をみながら自分を

彩り、神の苦勞を無視してまで生まれたときより美しくなろうとする。彼女たちはキリスト教徒の目には醜聞の対象となる」「耳にペンダントをつけ、白粉をぬり、首や頭に真珠を飾ったりしないようにしなさい。髪の毛の色を変え、カールし、リボンで結ばないようにしなさい。さもないと地獄の却火を招く」と批判する。

15世紀に入り、オリビア・マイヤード⁶⁾は「顔を彩り、しっぽを上げている淑女、またしっぽをつけている娘たちに悩まされている紳士諸君。そのような姿で人々が樂園にいけると思ふか」と批判し、当時の『騎士ラ・トゥア・ランディの話』⁷⁾では「神が造られた本来の顔を化粧して変えることなく、神が造ったままにしておきなさい」「神は女性という人間をご自身のイメージでお造りになられ、そのことで愛をお与えになった。なのに女性たちはなぜそのことを忘れ、なぜ化粧し毛を抜いて、神から与えられた容貌を変えるのか」「自分を美しく見せ、他人の目を喜ばそうとし眉毛や額の毛を抜いたため、地獄に落ち、熱く熱した針が女性の眉毛やこめかみや額に刺された」とある。

ルネサンス期の修道士フィレンツォーラ⁸⁾は「自分の理想とする美をもたらすのは神のみであり、人工的な補正化粧は、我慢ならない忌まわしい行為」とし、エリザベス女王時代のフィリップ・スタップズ⁹⁾は「イングランド女性は、顔に彩色するためにオイルやアルコールや軟膏、化粧水などを使用し、それによって美しさが増すと考えている。しかし、そのことで魂が歪められることに気づかない者は、神の不満と義憤を招き、その声に大地は震え、その面前で天は溶解して消え去るであろう。我々すべてを造られた神よりも、なお美しく自分を作り上げることはできない」と批判する。また、当時の『ロビン・コンシエンスの話』¹⁰⁾では、世俗女ブラウド・ビューティーの「もし神がこの顔をベリーのような茶色に造ったのなら、白く化粧

し紅をつける。もし神がチェリーのように赤く造ったのなら、壁の白壁でこの血を干上がらせる。もし神が太く造ったなら縮こまってみせる。色白でさっぱりし、きれいですっきりしているのはなんて素晴らしいことなのだろう」という言葉に対し、これを「悪魔のおしゃべりと行動」とし、「髪を染めて燃え上がらせるのが大流行している。本当にあなたは恥ずかしげもなくやっている。聖書では、髪をそんなに痛めつけることは認められてはいない。恥とて思い頭を隠しなさい。髪を染めるのは不自然な行為なのだ」と記している。また、ビショップゲイトのセント・ポトフ寺院修道院長スティーヴン・ゴッソン¹¹⁾は「逆立った髪をした燃えるような頭。その針金のような毛髪は雄牛の角のように曲がっている。化粧をしたその顔は、どこからきたのか。新しい流行すべてを考え出すのは虚飾の主である悪魔にほかならない」と批判する。

17世紀中期に入ると、新大陸に移住を行うプロテスタントたちが増加した。そのようななか、イギリスの牧師トマス・ホール¹²⁾は、新大陸であるアメリカに移住したプロテスタントたちが「長髪は悪習で恥ずべき行為」として教会内での長髪を禁止し、長髪を続ける者を「神と人間とに同時に背かれるであろう」、また「男性の髭は全面的に支持するものの、長髪は否定し、女性の化粧とつけホクロを悪魔の仕業とみなしていた」ことを伝えている。そして、「身体に化粧をしたり彩ったりする人工的な行為は罪深く、忌まわしい」「髪や顔に化粧し、彩る技術を淫らな女に最初に教えたのは悪魔である。顔の化粧は神の創造物のなかにはなく、悪魔との結合によって生まれたものの一つである」「聖書には聖人が化粧をし、つけホクロをしたとはどこにも書いていない。なぜならそれは醜い行為である」と化粧批判をまとめている。

王政復古期に入ると、ロンドンのジョン・ダントン¹³⁾は聖書の「正直な婦人は化粧できない

だろうかと神は自問された（エゼキエル書29：40）」を引用し、「化粧は無慈悲にも墮落へと追い込む」と批判する。

18世紀後期に出版されたレディス・マガジン¹⁴⁾では、「神が造られた顔を女は化粧で別の顔にしてしまった」と化粧批判を記している。

このように、キリスト教社会では、数多くの化粧に対する否定や批判をみることができる。しかしながら、キリスト教聖職者や各時代に出版された書物すべてが化粧を非難し、禁止しようとしていたわけではない。次は、化粧を勧めた主張である。これについても、リチャード・コーソンの『メイクアップの歴史』に依拠してまとめておく。

【化粧の肯定】

15世紀、説教師ラ・マルカのジャコモ¹⁵⁾は説話集エクセンプラにおいて、美容術に凝った若い娘が宴会の日に悪魔に連れ去られる話を述べ、虚飾は愚かさと同時に罪の源でもあると説くものの、「結婚相手を探す適齢期の娘やひどい身体障害に悩む女性」には化粧をすることを認めている。中世初期の教会¹⁶⁾は、肌を覆っている汚さで黒ずむことよりも白粉により肌が白くなることに多大な関心を持っていた。当時、修道士に対して教会は、必要最低限の洗浄と秘蹟前日の清めの入浴だけを認め、その他の入浴は夏でも禁止していた。すなわち、肌を白粉で美しくすることに比べれば、汚れで黒くなることはまじだった¹⁷⁾のである。しかし、修道士たちは体臭を紛らわすことを意図し、1508年にサンタ・マリア・ノベラ修道院ドミニコ派の修道士たちによって香水製造所が開設されている。

17世紀に入り、ロバート・コドリントン¹⁸⁾は「目に化粧をしたためにイザベルが犬に食い尽くされたことには、今では異議が唱えられている。彼女の死の原因は、髪を整え窓から外をみること、この二つを同時に行ったことに意味が

ある。聖書のどこをみても化粧を罪としてことさらに禁じている道徳上の指示はない。ユダヤの女王エステルは、甘美な香料と豪華な衣服と美しい色彩を身につけ、王の視線と愛情を自分にもっとひきつけるために、流行のものは何でも身につけた」と化粧を勧めている。また、キリスト教聖職者の言葉ではないが、1694年に出版された婦人辞典¹⁹⁾の「美容術」の項目では「女性は神に仕えながら、同時に男性を喜ばすことはできないのだから、化粧をすべきではない」という主張に対して、「神の僕で男性を喜ばすことができないのであれば、家来は王を、子は親を、商人は客を喜ばせることができない」とする反論が記されている。もっとも「美しくする」の項目では、「神が自分の喜びのために非常に素晴らしく造り上げられた顔や肌色を、多くの人々は、絶えず手直ししようとして、結局は台無しにしてしまっている」と化粧を批判しているが。

18世紀に入るとジェレミー・テラー²⁰⁾は「女性は、男性の快樂のため神により造られデザインされたものである。ならば、女性が作られた目的を全うするように努力することは、女性の努めであり義務である」「女性たちよ、神がお与えになった美を磨き、できる限り美しくあり続けなさい。外見を洗練させることが罪であるといわれる筋合いはない」と女性が美しく身を飾ることを勧めている。

さらに19世紀後半のハリエット・ハバード・エア²¹⁾は「化粧をして、失った魅力を優美に回復させるのは当然であるばかりか賢明である。素朴で退屈で飾り気のない女性の夫に限って、決まってデライラのような女性の罫の犠牲やイザベルのような悪女の作られた魅力に屈するから」と化粧を勧めている。

このように、化粧を勧めている者のほとんどは聖職者ではないものの、彼らは聖書を引用して化粧を勧めている。ロバート・コドリントン

22) は「聖書のどこをみても化粧を罪としてことさらに禁じている道徳上の指示はない」とまで述べている。聖書は、キリスト教における信仰と生活の規範である。その聖書にもっとも忠実であるべき聖職者たちが、聖書を解釈し民衆にキリストの教えを伝え、化粧を否定・批判しているはずである。はたして、本当に聖書のどこをみても化粧を罪として禁じている道徳上の指示はないのであろうか。次に、実際に聖書を読み直し、化粧に関する記述をまとめてみたい。

なお、これまで世界各国において数多くの聖書が翻訳・出版されているが、本研究では1993年に日本で出版された『聖書新共同訳』²³⁾を用いた。ここで一つ考えなければならないことは、今回用いた日本語訳の聖書と化粧を批判した聖職者たちの用いた聖書を同等に扱ってよいのかという問題である。例えば、聖書において日本語で「ズボン」という言葉は、アメリカでは「パンツ」と訳され、イギリスでは「トラウザー」と訳されるなど、国や時代が異なることにより用いられる単語が異なる場合は少なくない。しかしながら、国際日本文化研究センターのテモテ・カーン助教授によれば、用いられる単語は異なっても、それが指し示す事物の体質が異なることはないと考えられる。また、本研究は、聖書における化粧に関する記述を聖書学的研究としてではなく、文化・風俗的研究として概観することを目的としており、化粧に関する単語がどの章節に、どのような背景で出現しているかに注目するため、言葉の差異については本研究では扱わず、問題としない。

3. 聖書における化粧の記述

【化粧品】

旧約聖書に「からだを洗って香油を塗り、肩掛けを羽織って麦打ち場の下っていきなさい(ルツ記3:3)」「12ヶ月の美容の期間が終わる

と、娘たちは順番にクセルクセス王のもとに召されることになった。娘たちには6ヶ月間ミルラ香油で、次の6ヶ月間ほかの香料や化粧品で容姿を美しくすることが定められていた(エステル記2:12)」「ダビデは地面から起き上がり、身を洗って香油を塗り、衣を替え、主の家に行って礼拝した(サムエル記下12:20)」「ぶどう酒は人の心を喜ばせ、油は顔を輝かせ、パンは人の心を支える(詩篇104:15)」「お前の生まれた日に、お前のへその緒を切ってくれる者も、水で洗い、油を塗ってくれる者も、塩でこすり、布にくるんでくれる者もいなかった(エゼキエル書16:4)」「私はお前を水で洗い、血を洗い落とし、油を塗った(エゼキエル書16:9)」「モーセは幕屋を建て終わった日に、幕屋とそのすべての祭具、祭壇とそのすべての祭具に油を注いで聖別した(民数記7:1)」「サムエルは油の壺をとり、サウルの頭に注ぎ、口づけしていった(サムエル記上10:1)」「エステルに好意を抱き、めをかけた。早速化粧品と食べ物を与え、(エステル記2:9)」「イエフがイズレエルに来たとき、イゼベルはそれを聞いて、目に化粧をし、髪を結び、窓から見下ろしていた(列王記下9:30)」「喪を装ってほしい。喪服を着、化粧もせず、長い間死者のために喪に服しているように装うのだ(サムエル記下14:2)」「辱められた女よ、何をしているのか。緋の衣をまとい、金の飾りをつけ、目の縁を黒く塗り、美しく装ってもむなしい(エレミヤ記4:30)」とある。

また、新約聖書には「あなたがたのなかで病気の人は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい(ヤコブの手紙5:14)」「多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした(マルコによる福音書6:13)」「近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した(ルカによる福音書10:

34)「あなたが油を注がれた聖なる僕イエスに逆らいました(使徒言行録4:27)」「一人の女が、純粹で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持ってきて、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた(マルコによる福音書14:3)」とある。

このように、香油や香料に関する記述が中心である。容姿を美しくするためにミルラの香油やオリーブ油が肌の手入れなどに使われ、医療用としても用いられた。また、治療には油だけではなく、ぶどう酒も用いられた。油は神の靈の象徴とされ、宗教的にも重要視された。王宮などでは化粧が行われていたものの、具体的な化粧品に関する記述は少ないが、アイメイクなどがなされ、喪に服するときは化粧をしなかった。香油は非常に高価であり、ナルド香油は小瓶で労働者300日分の給料と同額であり、その瓶はアラバスター石で作られた。

【肌色】

旧約聖書に「私の恋しい人は赤銅色に輝き(雅歌5:10)」「手はタルシシュの珠玉をはめた金の円筒 胸はサファイアをちりばめた象牙の板足は純金の台に据えられた大理石の柱(雅歌5:14-15)」「首は象牙の塔(雅歌7:5)」とある。

男性は日によく焼けた色、女性は乳白色がよしとされた。古代オリエント文化では、日中に屋内にとどまれるほど贅沢な色白の女性のほうが、屋外で日にさらされる労働を行っている色の黒い女性よりも好まれていた。

【髪】

旧約聖書に「鋭い剣を取って理髪師のかみそりのようにそれを手に持ち、あなたの髪の毛とひげをそり(エゼキエル書5:1)」「その人は聖なるものであり、髪は長く伸ばしておく(民数記6:5)」「毎年の終わりに髪を刈ることにして

いたが、それは髪が重くなりすぎるからで、刈り落とした毛は王の重りで200シケルもあった(サムエル記下14:26)」「白髪は輝く冠(箴言16:31)」「頭は金、純金で、髪はふさふさと、烏の羽のように黒い(雅歌5:11)」「祭司はそれから、女を主の御前に立たせ、その髪をほどき、罪の判定のための献げ物、すなわち嫉妬した場合の献げ物をおく(民数記5:18)」「彼女は髪を下ろし、つめを切り(申命記21:12)」「イエフがイズレエルに来たとき、イゼベルはそれを聞いて、目に化粧をし、髪を結び、窓から見下ろしていた(列王記下9:30)」「頭髪の一部をそり上げたり、ひげの両端をそり落としたり、身を傷つけたりしてはならない(レビ記21:5)」「皆、髪をそり上げ、ひげをそり落とす(イザヤ書15:2)」「お前の長い髪を切り、それを捨てよ(エレミヤ記7:29)」「身体を傷つける者も髪をそり落とす者もない(エレミヤ記16:6)」「シケム、シロ、サマリアから来た八十人の一行が、ひげをそり衣服を裂き、身を傷つけたその姿で通りかかった(エレミヤ記41:5)」「ガザでは頭をそり落としアシュケロンは破滅する(エレミヤ記47:5)」「みな髪をそり、ひげを落とし、手に傷をつけ、身に粗布をまとう(エレミヤ記48:37)」「どの腰にも粗布をまとわせどの頭の髪の毛もそり落とさせ(アモス書8:10)」「ヨブは立ち上がり、衣を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏していった(ヨブ記1:20)」「髪をそり落とせ。禿鷹の頭のように大きなはげをつくれ(ミカ書1:16)」とある。

また、新約聖書には「男は長い髪が恥じであるのに対し、女は長い髪が誉れになることを、自然のそのものがあなた方に教えていないでしょうか。長い髪は、被り物の代わりに女に与えられているのです(コリントの信徒への手紙Ⅰ11:14)」「男は誰でも祈ったり、予言したりする際に頭に物を被るなら、自分の頭を侮辱する

ことになります。女は誰でも祈ったり、予言したりする際に頭に物を被らないなら、その頭を侮辱することになります。それは、髪を毛をそり落としたのと同じだからです（コリントの信徒への手紙Ⅰ11：5-6）」とある。

エジプト人は剃髪をし、ナジル人は長髪を肩にたらし、イスラエル人は奴隷女性や理髪師により適度な長さに整髪した。男性の白髪は、長寿のしるしとして尊ばれ、女性はふさふさとした黒髪が好まれた。長髪を男子は恥とし、女子は誉れとした。女性が髪を切ったり剃ったりすることは恥ずかしいことであり、旧約時代では女性が髪をほくくことは「ふしだらな女」のしるしであり、髪を下ろすことは喪に服することを意味し結ばれていたが、新約時代では女性が髪を編むことをよしとしなかった。またイスラエルの嘆きの儀式では女性が髪を剃り落とすことが要求された。男性が髪を剃ることは悔いのしるしであった。中世イエズス会のカトリック修道士は、頭の頂部を剃っていた。ちょうど、日本にキリスト教を伝道したフランシスコ・ザビエルの肖像画のようなイメージである。その髪型は「TONSURE」²⁴ と呼ばれるが、その起源はミカ書1：16にみることができる。

【つめ】

旧約聖書に「彼女は、髪を下ろし、爪を切り（申命記21：12）」とある。

喪に服する場合などはつめが切られた。

【ひげ】

旧約聖書に「ヨセフは直ちに牢屋から連れ出され、散髪をし着物を着替えてからファラオの前に出た（創世記41：14）」「もみあげをそり落したり、ひげの両端をそってはならない（レビ記19：27）」「ハヌンはダビデの家臣を捕らえ、ひげを半分そり落とし、衣服も半分、腰から下を切り落として追い返した（サムエル記下10：

4）」「頭髪の一部をそり上げたり、ひげの両端をそり落したり、身を傷つけたりしてはならない（レビ記21：5）」「皆、髪をそり上げ、ひげをそり落とす（イザヤ書15：2）」「お前の長い髪を切り、それを捨てよ（エレミヤ記7：29）」「身体を傷つける者も、髪をそり落とす者もない（エレミヤ記16：6）」「シケム、シロ、サマリアから来た八十人の一行がひげをそり衣服を裂き、身を傷つけたその姿で通りかかった（エレミヤ記41：5）」「みな髪をそり、ひげを落とし、手に傷をつけ、身に粗布をまとう（エレミヤ記48：37）」とある。

エジプト人はひげを剃り、時折つけひげを用いた。イスラエル人は、もみあげやひげを剃ることを異教徒的習慣として禁止した。他人のひげを抜いたり、切ったりすることは恥辱を与えることを意味した。また、イスラエルの嘆きの儀式のときはひげが剃られた。

【手】

新約聖書に「ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人の言い伝えを固く守って、念入りに手を洗ってからでないと食事をせず、また市場から帰ったときには、身を清めてからでないと食事をしない（マルコによる福音書7：3-4）」とある。

当時の人々は昔の人の言い伝えを守って、食事の前には念入りに手を洗った。また市場を不浄のものとしてとらえ、帰ったときも身を清めてから食事を行った。

【足】

新約聖書に「泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った（ルカによる福音書7：38）」「このマリアは、主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である（ヨハネによる福音書11：2）」「マリアが純粹で非常に高価なナルド

の香油を1リトラ持ってきて、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった（ヨハネによる福音書12：3）」「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなた方も互いに洗い合わなければならない（ヨハネによる福音書13：14）」とある。

足を洗うことは歓待の行為であり、敬意の表現であった。

【齒】

旧約聖書に「齒は雌羊の群れ。毛を刈られ洗い場から上がってくる雌羊の群れ。対になってそろい、連れあいを失ったものはない（雅歌4：2）（雅歌6：6）」とある。

今日、齒のホワイトニングや矯正が盛んに行われ、審美歯科なども多く存在するが、聖書世界においても白く、齒並びが整ったものがよいとされた。

【香料】

旧約聖書に「主はモーセにいわれた。以下の香料、すなわち、ナタフ香、シェヘレント香、ヘルベナ香、これらの香料と純粋な乳香をそれぞれ同量取り、香を作りなさい（出エジプト記30：34）」「香料師の混ぜ合わせ方に従ってよく混ぜ合わせた、純粋な、聖なる香を作る（出エジプト記30：35）」「香料調合師のハナンヤ（ネヘミヤ記3：8）」「恋しい方はミルラの匂い袋私の乳房のあいだで夜を過ごします（雅歌1：13）」「12ヶ月の美容の期間が終わると、娘たちは順番にクセルクセス王のもとに召されることになった。娘たちには6ヶ月間ミルラ香油で、次の6ヶ月間ほかの香料や化粧品で容姿を美しくすることが定められていた（エステル記2：12）」「香油も香りも心を楽しませる（箴言27：9）」「床にはミルラの香をまきました、アロエやシナモンも（箴言7：17）」「ナルドやサフラン、菖蒲やシナモン 乳香の木、ミルラやアロ

エ（雅歌4：14）」「あなたたちの娘を徴用し、香料作り、料理女、パン焼き女にする（サムエル記上8：13）」とある。

また、新約聖書には「ニコデモも、没薬と沈香を混ぜたものを100リトラばかり持って来た。彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ（ヨハネによる福音書19：39）」とある。

儀式用としてナタフ香・シェヘレント香・ヘルベナ香・乳香から香料調合師が香を作り、私用は禁止された。イエスの葬りには没薬と沈香が用いられた。化粧用に0は、没薬を匂い袋に入れて胸につけ香らせ、身だしなみとして楽しんだ。アロエやシナモンも寝室などの香として用いられた。香料作りは女性の職業であった。

【入れ墨】

旧約聖書に「身を傷つけたり、入れ墨をしてはならない（レビ記19：28）」とある。

古来より日本は儒教の影響を受け、「身体髪膚受之父母不敢毀傷孝之始也」²⁵⁾と思想的に身体を傷つける行為を禁じ、明治時代には法律で禁止されたが、聖書世界においても身体に傷をつけることや入れ墨をすることは禁止された。これは、当時の囚人たちに対して顔面に烙印を押すことを「神にかたどって創造された（創世記1：27）」神の似姿を傷つけてはならないと禁じているのと同様の意味であると考えられる。

【鏡】

旧約聖書に「青銅の洗盤と台を作ったが、それは臨在の幕屋の入り口で務めをする婦人たちの青銅の鏡でつくった（出エジプト記38：8）」「鑄て造った鏡のような硬い大空（ヨブ記37：18）」とある。

青銅製で木の取手がつけられていたものが用いられていた。一般的にガラス製の鏡は、ローマ時代になってから登場した。

【装身具】

旧約聖書に「男も女も次々と襟留め、耳輪、指輪、首飾り、およびすべての金の飾りを携えてきて、みな金の献納物として主に捧げた（出エジプト記35：22）」「私はまた、装身具をお前につけ、腕には腕輪、首には首飾りをつけた。また、鼻に飾りの輪を、頭には美しい冠をかぶらせた（エゼキエル書16：11-12）」「私たちは、めいめいで手に入れた腕飾り、腕輪、指輪、耳輪、首飾りなど金の飾り物を献げ物として主にささげ（民数記31：50）」「あなたのひものついた印章と、もっていらっしゃるその杖です（創世記38：18）」「頭にかぶっておられた王冠と腕につけておられた腕輪を取って（サムエル記下1：10）」「印章のついた指輪を自分の指からはずしてヨセフの指にはめ、亜麻布の衣服を着せ、金の首飾りをヨセフの首にかけた（創世記41：42）」「ベルシャツアルは、ダニエルに紫の衣を着せ、金の鎖をその首にかけようように命じ（ダニエル記5：29）」「民はこの悪い知らせを聞いて嘆き悲しみ、一人も飾りを身につけなかった主がモーセに、イスラエルの人々に告げなさい。あなたたちはかたくなな民である。私がひとときでも、あなたのあいだにあって上るならば、あなたを滅ぼしてしまうかもしれない。直ちに、身につけている飾りを取り去りなさい。そうすれば、私はあなたをどのようにするか考えようといわれたので、イスラエルの人々は、ホレブ山をたつて後、飾りはずした（出エジプト記33：4-6）」「足首の飾り、額の飾り、三日月形の飾り、耳輪、腕輪、パール、頭飾り、すね飾り、飾り帯、匂い袋、お守り、指輪、花輪、晴れ着、肩掛け、スカーフ、手提げ袋、紗の衣、亜麻布の肌着、ターバン、ストール（イザヤ書3：18-23）」とある。

また、新約聖書には「あなたがたの集まりに、金の指輪をはめた立派な身なりの人が来（ヤコブの手紙2：2）」「手に指輪をはめてやり、足に

履物を履かせなさい（ルカによる福音書15：22）」「婦人は慎ましい身なりをし、慎みと貞淑をもって身を飾るべきであり、髪を編んだり、金や真珠や高価な着物を身につけてはなりません。（テモテへの手紙Ⅱ2：9）」「あなたがたの装いは、編んだ髪や金の飾り、あるいは派手な衣服といった外面的なものであってはなりません。むしろそれは、柔和でしとやかな気立てという朽ちることのないもので飾られた、内面的な人柄であるべきです（ペトロの手紙Ⅲ3：3-4）」とある。

当時、エルサレムに東方諸国などから様々な装身品がもたらされていた。特に、襟留め、耳輪、指輪、腕輪、首飾りなどが用いられた。指輪の多くは黄金製で宝石により装飾され、富者のしるしとして、また権威の象徴・護符として使用され、貧しい人々を除き、男性は取引の際の印に使用するために身につけた。腕輪は男性も使用し、耳輪は金の輪で女性たちが使用した。首飾りは位階の記章として使用された。装身具は、悲しみの出来事があったときは取り外された。旧約時代に使用されていた女性の装身具は、新約時代に入ると心の美しさを強調するための対比として、華美な装いとして表現されるようになった。

4. 聖書における化粧の否定・批判

これらが、旧約・新約聖書にみられる化粧に関する記述であり、化粧に関連し化粧品や化粧用具、また化粧が施されるであろう部位についてもまとめてみた。しかしながら、化粧そのものに対する記述は極めて少なく、また具体的な化粧否定の記述もほとんどない。

例えば、「婦人は慎ましい身なりをし、慎みと貞淑をもって身を飾るべきであり、髪を編んだり、金や真珠や高価な着物を身につけてはなりません（テモテへの手紙Ⅱ2：9）」とあるが、

これは神やイエスによる否定ではなくテモテの言葉であり、「慎ましい」という適度な化粧は認めており、化粧に対する全面的否定ではない。また、「あなたがたの装いは、編んだ髪や金の飾り、あるいは派手な衣服といった外面的なものであってはなりません。むしろそれは、柔和でしよやかな気立てという朽ちることのないもので飾られた、内面的な人柄であるべきです（ペトロの手紙Ⅰ3：3-4）」とあるが、これは前後の文章に「妻たちよ、自分の夫に従いなさい（ペトロの手紙Ⅰ3：1）」「神に望みを託した聖なる夫人たちも、このように装って自分の夫に従いました（ペトロの手紙Ⅰ3：5）」とあることから、神との関係における化粧の記述ではなく、妻が夫に対してどのようにあるべきかという記述にほかならず、内面を強調するための対比としての化粧の記述である。さらに「辱められた女よ、何をしているのか。緋の衣をまとい、金の飾りをつけ 目の縁を黒く塗り、美しく装ってもむなしい（エレミヤ記4：30）」とあるが、これも前後の文章に「騎兵や射手の叫びに、都を挙げて逃げ去り茂みに隠れ、岩に登る。都はまったく見捨てられ、だれひとりどまる者はいない（エレミヤ記4：29）」「愛人らはお前を退け、お前の命を奪おうとする（エレミヤ記4：30）」とあることから、化粧そのものをむなしいと否定しているのではなく、美しく装うことをむなしいとしている。

具体的な化粧否定・批判の記述がないにもかかわらず、キリスト教社会では紀元3世紀頃から18世紀頃まで、長きにわたって化粧が否定・批判され続けた。なぜ、化粧が否定・批判されたのか。その理由として、聖書世界における化粧の起源をみてみよう。

5. 聖書における化粧の起源

聖書における化粧の起源は、エチオピア語エ

ノク書（エノク書にはエチオピア語により伝わるものとスラブ語により伝わるものがある）にみることができる。エノク書とは、アダムとイブの子カインの子であり（創世記4：17）、ノアの父（創世記4：29）であるエノクによって書かれたとする多くの天使が登場する物語のことである。しかしながら、このエノク書は現在、聖書66巻のなかには収蔵されていない。我々が聖書という場合、旧約・新約全66巻からなる書物を指すことは前述した。しかしこの場合、聖書とは「聖典」としての聖書を指し、このほかに旧約聖書外典・旧約聖書偽典・新約聖書外典が存在する。

旧約聖書外典とは、紀元前3世紀から紀元1世紀のヘレニズム時代に書かれたユダヤ教文書のことであり、ユダヤ教の正典からはずされていたもの、またキリスト教教会により受容された主にギリシア語で書かれた歴史記述・民間説話・哲学的論述・知恵文学・黙示文学などの文書である。キリスト教教会において外典は、正典に次ぐ権威と価値を持つものと考えられている。また旧約聖書偽典とは、旧約聖書の聖典・外典以外の、主にエチオピア語、シリア語、スラブ語で書かれたヘレニズム時代のユダヤ教文書のことである。新約聖書外典とは、紀元2世紀から3世紀頃に書かれた文書であり、イエスにより使徒達に直接与えられた「秘義」として位置づけられている。偽典は、その書名に預言者・賢者・聖者などの名を冠して権威付けているものの、キリスト教教会ではその信仰的・文学的価値は正典・外典よりも劣るとされる。そして、初期のキリスト教ではエノク書は聖典と考えられていたものの、現在ではエチオピア正教においてのみエチオピア語エノク書が正典として採用されている。

では、化粧の起源をエチオピア語エノク書にみよう。エチオピア語エノク書には次のように書かれる。「アザゼルは剣、小刀、楯、胸当て

の作り方を人間に教え、金属とその製品、腕輪、飾り、アンチモンの塗り方、眉毛の手入れの仕方、各種の石のなかでも大柄の選びすぐったもの、ありとあらゆる染料を見せた（エチオピア語エノク書8：1）」と。アザゼル（Azazel）とは、天使の名であるが、墮天使である。アザゼルは同じく天使のシェムハザイ（Shemhazai）と、神が邪悪と偶像崇拜が地上にはびこるのをみかねノアの大洪水を起こそうとしていたとき、神に対して人間を創造したことの危険性を説いた。しかし、神は天使が罪のない天国ではなく誘惑に満ちた人間界に住んでいたのなら、人間よりも墮落するであろうことを説くと、彼らは神の許しを得ることなく200人もの天使を引き連れ、罪や誘惑だらけの人間界でも、罪を犯さずやっつけられることを証明しようと人間界に降りていった。しかしながら、彼らが人間界に降りたつや否や、彼らは人間の女性たちと性的関係を持ってしまう。後に、シェムハザイは自らの行いを悔やみ、オリオン座として天国と人間界のあいだで宙吊りとなる。また、シェムハザイと同様に人間の女性と性的関係を持ち続けたアザゼルは、男性を惑わす手段として女性たちに化粧や宝石の使用を教え、彼女たちとのあいだに後にバベルの塔を建設することとなる巨人たちを産ませていった。そのため、聖書において化粧とは神が人に与えたものではなく、墮天使が与えた「男を惑わせる手段」と考えられている。エチオピア語エノク書には、ほかにも化粧の記述がみられる。「君たちは男性でありながら、女たちよりも化粧に凝り、うら若い娘も顔負けするような長袖の衣をまとい、豪華、絢爛、権勢、金銀、紫、威厳、などに没り、馳走を湯水のように浴びている。これがために、彼らには教えも知恵もなく、その財産と名誉と栄華とともに一緒に滅びることは必定である（エチオピア語エノク書98：2-3）」と。アザゼルにより、女性に与えられた「男を惑わす

手段」としての化粧を、当の女性以上に男性が行っている。そして、エチオピア語エノク書では男女を問わず、化粧を行うことは神の御心に適うものではないと、否定・批判をしているのである。

化粧の否定・批判の根源は、どうやら聖書正典にではなく、旧約聖書外典や新約聖書外典や旧約聖書偽典にありそうである。そこで旧約聖書外典や新約聖書外典や旧約聖書偽典²⁶⁾において化粧がどのように表現されているか、次に詳しくみる。

6. 旧約聖書外典・旧約聖書偽典・新約聖書外典における化粧の記述

【化粧】

旧約聖書外典に「彼女はまどっていた粗布を取り、やもめの衣を脱ぎ、水で丹念に身体を洗い、濃い香油を塗りこみ、髪をすき、髪飾りをつけ、彼女の夫マナセの存命中に着ていた派手な衣服を身にまとった。（ユデイト書10：3）」とある。

旧約聖書偽典には「王は王国全州に役人を任命し、みめ麗しい若い乙女を選んで首都スサの婦人の局へ送らせ、彼女らを婦人の警護にあたる臣官の手に渡させ、その臣官に、身体を磨く軟膏を与えさせたり、その他の世話をさせて下さい（エステル付記2：3）」「乙女は彼の気に入り、彼の前で恵みを得、彼は彼女に対してはことに熱をいれて身体を磨く軟膏や、各婦人の受け取る分け前や、王宮から支給される七人の侍女を得た（エステル付記2：9）」「12ヶ月がたつと、乙女は王の前に出るときとなった。このように、6ヶ月が香油を塗るために、6ヶ月が薫香と婦人用の軟膏を用いるために、あらかじめ定められた準備の期間が満ちたのである（エステル付記2：12）」とある。

新約聖書外典には「あなたの顔を整え、髪を

結い、あなたに似合った衣服をつけなさい（ペトロ行伝17）」「私どもの町で結婚式が行われることになりました、式を行うのは私ととても親しい者たちだったのです。そこで、妻と娘は見事に化粧をして行ったのである（トマス行伝62）」「女奴隷として化粧もせずに寝床に引かれていくだろう（シビュラの託宣3：358）」とある。

旧約聖書外典・旧約聖書偽典・新約聖書外典においても、化粧や化粧品そのものに関する記述はあまりみられない。しかしながら、当時の人々に化粧が行われていたことや、化粧を行える状況にいる者か否かが社会的身分の確認にもつながっていることがわかる。

【香油・香木】

旧約聖書外典に「彼女は、イスラエルの苦しむ者たちを奮い立たせるために寡婦の衣を脱いで顔に香油を塗り（ユディト書16：7）」「わたしの四肢は彼への賛歌によって油を注がれる（ソロモンの詩篇40：3）」「わたしは、肉桂や、芳香を発するアスパラトスのように、また極上の没薬のように芳しい香りを放った。楓子香、シクレテ香、蘇合香、また幕屋のなかにたちこめる乳香の煙のように（ベンシラーの知恵24：15）」「モーセは聖油を注いで彼を聖職に命じた（ベンシラーの知恵45：15）」とある。

旧約聖書偽典には「ミカエルは私の服を脱がせ、私によき油を塗った。その香りは没薬のようで（スラブ語エノク書9）」「ミカエルはすぐに降って来たので、門を開いた。彼はオリーブ油を運んできた（ギリシア語バルク黙示録15：1）」「お前たちの頭の上に土をかけ、泣いて、神に頼みなさい。私を憐れんで下さるように、またその天使を楽園へ遣わして、油のとれるあの木の果実を私にお与えくださるようにと。お前がそれを運んできてくれたならば私はその油を塗って、休息を得るであろう（モーセの黙示

録9）」「彼は、乳香、楓子香、没薬、ナルド、ミルラ、香料、コストムなどの香りを朝な夕な炊いた（ヨベル書16：24）」「アダムの身体を亜麻布で覆いなさい。それから、よい香りのする油を運んできて、彼に注ぎなさい（モーセの黙示録40）」「彼らは公正なるアブラハムの身体を彼の死後三日まで、神の霊の吹き込まれた香油と薫香で手入れし、それから約束の地マムレの檜の樹の許に彼を埋葬した（アブラハムの遺訓20）」「セツとその母は、病気のアダムに塗油しようとして、憐みの油を求め、楽園のある地方まで歩いていった（アダムとエバの生涯40）」「食卓の上に蜜蜂の蜜窩が置かれてあるのを見つけた。蜜窩は雪のごとく真っ白で、蜜がいっぱいであった。それは生命の香りがあった（ヨセフとアセナテ16：4）」「この匂い（蜜窩）はまるで香水の香りですのでから（ヨセフとアセナテ16：6）」「セツはその母エバとともに楽園の近くへやって来た。そしてそこで泣きながら、神に頼んだ。その天使を遣わし、彼らに憐れみの油をお与えくださるようにと（モーセの黙示録13）」「どうか楽園から香木を取ってくることをお許してください（モーセの黙示録29）」「神が憐れんで、生命の油がとれるあの憐れみの木にその天使を遣わし、お前たちがそれで私に塗油するよう（アダムとエバの生涯36）」「イアエルよ、永遠なる王よ、楽園のなかからアダムに香木を与えるようにお命じください。すると神はアダムによい香りのする香木をとってくるように命じた（モーセの黙示録29）」「アダムはエデンの園を出たその日、日の出とともに恥部を覆ったあの日から、乳香、楓子香、没薬、薬味などの香ばしいにおいのする香りを炊いた（ヨベル書3：27）」とある。

新約聖書外典には「自分の手でペトロを十字架から降ろし、そのからだをミルクとぶどう酒で洗いました。そしてセムナの乳香をすりつぶし、さらに五ツムナの没薬とロカイと薬草をも

すりつぶし、その死体に塗りました（ペトロ行伝40）」「獐猛な野獣が投げ込まれるに及んで、婦人たちはさらに大きな声で叫び、テクラのためにある者は花を、ある者は甘松香を、ある者は肉桂を、ある者はインドの香料を闘技場に投げ込み、そのあたりはそれらの香りでいっぱいになった。すると投げ込まれたすべての野獣たちは、眠気に襲われたかようになって（パウロ行伝35）」「各自が香油を取り、それをある者は彼の顔に、ある者はあごに、ある者はからだのほかの部分にぬった。しかし、使徒は自分の頭の頂部に、また少しを自分の鼻腔のなかに塗り、自分の耳のなかにも滴下し、彼の齒にもこすり、彼の胸まわりに注意深くぬりつけたのである（トマス行伝5）」「彼は彼らに、油によって封印を受けるように、油を持ってくることを命じた（トマス行伝26）」「使徒は油をとり、彼らの頭に注ぎかけ、彼らに塗り、塗油して、言いはじめた（トマス行伝27）」「あなたがクセノフオンの群れの内にあり、それに聖なる油を塗り、傷から癒し、食い荒らす狼から守って下さい（トマス行伝67）」「塗油のための聖なる油よ。この油塗りによって彼女によって彼女を癒して下さい（トマス行伝121）」「イエスよ、あなたの勝利の力をきたらしめ、この油の内に宿らせて下さい。ちょうど、油の同族なる木の内にかつての油の力が宿っていたように。そこで、あなたの聖なる名を捧げるこの油に賜物を住まわさせて下さい。こういってまずウァザンの頭に油を注ぎかけ、それから女たちの頭に注いだ（トマス行伝157）」とある。

登場する香油・香木の種類は正典と同じである。没薬、楓子香、シクレテ香、蘇合香、乳香などは、神の愛でる香りである。香油は神の霊の象徴であり、儀式のため、医療用として、また調理用として利用された。香木は、神がアダムに取りに行くように命じていることから、香油や香木は墮天使が与えた化粧とは異なり、

神が与えたものとして考えることができる。しかしながら、香りは聖なるものとしてのみ使用されたわけではなく、体臭を隠す芳香剤としての用途もあった。

【髪】

旧約聖書外典に「そこでお前は頭髮を抜き、彼らにすべての禍いをなげつけよ（第五エズラ書1：8）」「判断は白髪に、良策をわきまえることは古老にいかにもふさわしい（ベンシラーの智慧25：4）」「老人の冠は永年の人生体験（ベンシラーの智慧25：6）」「神殿では祭司たちが裂けた衣をまとして座に着く。その髪とひげは剃り落とされ、頭には覆いもなく（ベンシラーの智慧6：30）」「エルサレムに住んでいるイスラエルのすべての男と女と子どもは宮ノ前に平伏し、頭に灰を被り、主の前で粗布をさしだした。（ユデイト書4：11）」「ユデイトは平伏して灰を被り（ユデイト書9：1）」「この女は悲しんで大声で泣いており、心は深い悲しみに沈んでいた。その衣は引き裂かれ、頭には灰を被っていた（第四エズラ書9：38）」とある。

旧約聖書偽典には「私はお前の老齢と白髪とには敬意を表する（第四マカベア書5：7）」「幸いな老齢よ、尊厳な白髪よ（第四マカベア書7：15）」「奥のあいだに閉じこもっているはずの娘たちも、母親と一緒に駆け出し、頭に灰とちりを被り、嘆きうめく声で通りを満たした（第三マカベア書1：18）」「自分たちの頭にちりを被って地に身を投げ出し、神の前で嘆いてくれ（アダムとエバの生涯36）」「その栄光の衣を脱いで苦悩と悲しみの衣を着、素晴らしい香料の代わりに灰と肥えを頭にかけて、その身体をはなはだしく卑しめ、彼女の喜びのしるしである装飾を捨てて、髪を編んだ（エステル記への付記C：13）」「山羊毛の荒布を手にし、腰に帯びした。それから頭の編み髪をほどこき、自分のからだに灰を振りまき、また灰の上に倒れこんだ

(ヨセフとアセナテ10:16)」「ご覧ください。私は金糸織りの王妃の衣を脱ぎ、黒い寛衣に身を包みました。ご覧ください。私は金の帯を解き、縄と山羊毛の荒布とを締めました。ご覧ください。私の頭の髪飾りは投げ捨て、頭に灰を振り撒きました。(ヨセフとアセナテ13:2-4)」とある。

新約聖書外典には「アンナは大変悲しんで、自分の喪服を脱ぎ、髪を洗い、自分の花嫁衣裳を着て、九つの頃に庭に散歩に下りていった(ヤコブ原福音書2:4)」「私は髪を短く切って、あなたの行くところにはどこでも従ってまいります(パウロ行伝26)」「彼はふたたび私には頭髮の薄い、しかし、ひげの豊かなあごをそなえた人として顕われた(ヨハネ行伝89)」「ヤコブには産毛が生え初めたばかりの青年として顕われた(ヨハネ行伝)」「全世界に対してあのしるしが現れるとき、子どもたちは生まれたときから白髪になり(シビュラの託宣2:154-155)」「お前の優美な髪を女主人が切り詰め、復讐を計って天から地に投げ(シビュラの託宣3:359-361)」「ヒゼキヤはこの言葉を聞くと、号泣し、衣を裂き、塵を頭にかけて。俯伏した(預言者イザヤの殉教と昇天1:10)」とある。

白髪は敬意の対象であり、灰被りは喪や悔やみ、深い悲しみや嘆きを表現している。また、女性が編んでいる髪を解いて振り乱すことも、悔やみ・懺悔の行為として表現されている。童話『賢者の贈り物』²⁷⁾で、妻が夫のために美しく長い髪を売り、懐中時計の止め具を購入する行為が描かれているが、旧約聖書偽典においても、髪が商品価値のあるものとして表現されている。しかしながら、悪魔によって髪を剃られるという行為の表現は、地下の神々に捧げられるべく潔められた者とみなされる表現でもある。また、女性が自由に旅をするために髪を切るという行為は、この世との決別の意味が含まれると考えられる。

【目薬】

旧約聖書外典に「胆汁は、眼に白いしみのできた人の眼に塗り、眼の白いしみに息を吹き込みなさい。そうすれば眼はよくなる(トビト書6:9)」「魚の胆汁を彼の両眼に塗りなさい。そうすれば薬が収斂作用を起こして白いしみを彼の両眼から取り去り、あなたのお父さんはふたたび視力を取り戻して、光をみることができ(トビト書11:8)」とある。

白いしみとは、角膜が厚くなるために生じるものであり、白内障に近いものであったと推測される。この治療法は、ヘレニズム時代の医術書やパピルスにもみられる。

【装飾】

旧約聖書外典に「そして足に履物を履き、足飾り、腕輪、指輪、耳輪、その他彼女の持っているあらゆる装飾品を身にまとい、彼女をみる男は誰でも目を欺かれるほどに美しく着飾った(ユディト書10:4)」「髪を束ねて髪飾りをつけ。亜麻布の衣をまとして彼の目を欺いた(ユディト書16:8)」「彼女は立ち上がると衣装や女の用いる様々な装飾品で身を飾った(ユディト書12:15)」とある。

旧約聖書偽典には「眉毛のあいだに神の名が彫られた「金板」(アリストテアスの手紙98)」「彼女は見事に衣装にかえて荒布を身にまとい、冠にかえて縄を頭に巻きつけました(ソロモンの詩篇2:20)」「彼女は神が締めて下さった絢爛たるヘアバンドをはずしとり、彼女の美しさは尊敬を失い、彼女は土に投げ捨てられました(ソロモンの詩篇2:21)」「彼女の頭上には、王冠を被り、彼女のこめかみには王冠型の髪飾りを締め、そのように飾られた彼女の頭をすっぱりヴェールで覆った(ヨセフとアセナテ3:11)」「アセナテは彼女の王妃の着るようなドレスを脱いで黒衣をつけ、黄金の帯を解くとき、そのかわりに、縄を巻き締め、頭からは王冠と髪飾り

を、その両手からは腕輪をはずした（ヨセフとアセナテ10：11）「黒い寛衣を脱ぎ、真新しく輝いている着物を着た。そして縄と山羊毛の荒布を腰からはずし、乙女らしい二重になった、輝く帯を、一つは腰に、一つは胸に締めた。頭から灰を落とし、きれいな水で顔を洗い、頭を美しくまた素晴らしいヴェールで隠した（ヨセフとアセナテ14：15-16）」「最近結婚して新婚の部屋にはいったばかりの若妻たちは結婚の喜びを悲嘆に変え、油をつけた髪をほこりで汚し、顔覆いもなし引き出され、異邦人の暴虐によってめっちゃくちゃにされた（第三マカベア書4：6）」とある。

新約聖書外典には「女中頭が私に与えたこの頭の帯をとってして下さい（ヤコブ原福音書2：2）」「テクラは夜、自分の腕に巻いてあった腕輪を門番に与え獄の戸を開けてもらい（パウロ行伝18）」とある。

様々な装飾品が記されている。王冠（ティアラ）がペルシアに、腕輪、首飾り、王冠型の髪飾り（ディアデマ）がエジプトに、顔隠しのヴェールがイスラム諸国に由来していることから、ヘレニズム時代に多様な貿易交流があったことを知ることができる。また、頭の帯とはディアデマのようなもので、髪バンドのような髪を束ねるものと考えられる。

【足】

旧約聖書偽典に「みよ、彼女以外の誰が金や銀のたらいで足を洗ったことであろうか（ヨブの遺訓25：6）」「アセナテが彼の足を洗うために水を持ってきた（ヨセフとアセナテ20：2）」とある。新約聖書外典には「あなたの弟子たちは足を洗わなかったのですか（オクシリコスバピルス840表面）」とある。

足を洗う行為は、正典・外典・偽典を通しての歓待の行為である。

【沐浴】

旧約聖書偽典に「ルベンはラケルの下女で父の側女ビルハがこっそり沐浴しているところをみて（ヨベル書33：2）」「パロの娘タルムテは河で水浴びしようと（ヨベル書47：5）」「彼女はいつものようにあたりの侍女だけを連れて入り、庭園のなかで水浴をしたいと思った。その日は非常に暑かったのである（ダニエル書への付加15）」「スザンナは侍女たちにいった。オリーブ油と香油を持ってきておくれ。そして、庭の戸を閉じなさい。私が水浴できるように（ダニエル書への付加7）」とある。

新約聖書外典には「私は潔いのです。というのは、私はダビデの池で沐浴をして、階段を下り、また別の階段を上って、白く潔い衣服をまとい、それからやってきてこれらの聖器具をみたのですから（オクシリコスバピルス840裏面）」「悪を投げ捨てて、水で全身を洗って、（シビュラの託宣1：339）」「女性の月ごとのものの時には性交をしないことを守り、性の交わりのおとには身を洗うようにするというを契機として、私に示されたものです（ペテロの宣教集11：33：4）」とある。

沐浴は、汚れを落とす意味と清めの意味があり、たんなる水浴びといったものではなかった。中世キリスト教教会が入浴にあまり関心がなかったことに反して、オリーブ油と香油を用いて身体を洗淨している。化粧汚れを落とすクレンジング剤として、油が用いられ商品化されるようになったのは、今日においても実に最近のことである。にもかかわらず、旧約聖書偽典では、すでにオリーブ油と香油が石鹸の代用として使用されている。

【洗顔・手洗い】

新約聖書外典に「食事をするときです。両手と顔を洗った後、祈りを捧げるとナプキンを取り出して全員のみている前でなつめやしの実を

一つとって食べた（ヨハネ行伝6）」とある。

正典同様、食事の前には手を洗い清めが行われていた。

7. 旧約聖書外典・旧約聖書偽典・新約聖書外典における化粧の否定・批判

旧約聖書外典・旧約聖書偽典・新約聖書外典における化粧の記述をみた。その内容は、ほとんど正典とかわりがない。しかしながら、正典に比べ化粧の否定・批判に関する記述は多い。

旧約聖書外典では「容姿端麗な女からは目をそらし、どうせ手出しのならぬ美貌に目をつけるな。女の美貌に惑わされたものは多く、これがために愛欲は火と燃え上がる（ベンシラーの智慧9：8）」とある。

旧約聖書偽典では「病弱に変ずる強健、飢えに変ずる豊かな食事、あるいは美醜に変ずる美などなんの役に立とう（シリア語バルク黙示録21：14）」「女の顔に目をとめるな（十二族長の遺訓ルベン3：10）」「子どもたちよ、だから女の美しさに心を向けてはならないし、女のすることに注意を向けてもいけない（十二族長の遺訓ルベン4：1）」「だから子どもたちよ、悪いのは女である。女は権威も体力も男に劣るので、男をひきつけるために容姿を利用する（十二族長の遺訓ルベン5：1）」「女について神の天使が次のように教えてくれた。つまり女は男より姦淫の霊に弱く、心中男に対して謀ることがある。そして飾り立てて男を惑わせ、秋波を送って毒をまきつけ、それから手練手くだでとりこにする（十二族長の遺訓ルベン5：3）」「女は面と向かって男に強いることができず、淫乱な容姿で男をだます（十二族長の遺訓ルベン5：4）」「男ごろを惑わそうと、髪や顔を飾ることのないよう、妻や娘に注意せよ。容姿を利用する女はすべて、永遠の罰に入れられてしまった（十二族

長の遺訓ルベン5：5）」「女たちは洪水の前に警護者たちを魅了した（十二族長の遺訓ルベン5：6）」「金を愛すな。女の美をみるな（十二族長の遺訓ユダ17：1）」「迷いの霊は彼に対して何の力もない。女的美しさを喜ばないからであり、それは自分の心を汚して破滅に導かない（十二族長の遺訓イッサカル4：4）」「私が彼女の家にいたときは、私が彼女と一緒に倒れこむようにと腕も脛もむき出しにしていたからである。彼女は、私を誘惑しようとして最高に飾り立てていたので、とても美しかった（十二族長の遺訓ヨセフ9：5）」とある。

新約聖書外典では「あの流れてきた水で沐浴し、からだを洗い、外側の皮膚をこすり、まるで遊女や笛吹き女が油を塗ったり、沐浴してからだを洗い、子どもの欲望のために化粧をしても、内側はあらゆる悪に満ちているのとかわりがない（オクシリコスパピルス840裏面）」「お前の外貌を飾るがよい。姦淫の報酬はお前のところにある（エズラ書第六15：54-55）」とある。

化粧の否定・批判に関連して美や容姿に関する記述もまとめた。すると、その表現にある方向性が発見できる。すなわちそれは、化粧そのものに対する否定・批判ではなく、化粧により美しくなった女性に対しての警戒である。化粧により美しくなった女性に対しての男性への警戒は、『ベンシラーの智慧』では自分の手におえないような美しい女性はどんなにがんばっても手に入れることができない。ならば、最初からそのような女性とは関わらないほうがよいと忠告している。『十二族長の遺訓ルベン』はさらに踏み込んで、女性の美しさに惑わされ惹きつけられるのは、男性が悪いのではなく女性が悪いとまで言っている。どうやら、神の似姿として作ったアダム（創世記2：6）から生まれた女（創世記2：22）は、神の似姿からは程遠く、常に男を誘惑し男に対して謀ることがあ

るようである。しかしながら、女性が男性を誘惑するようにさせたのは、実は他ならぬ神自身である（創世記3：16）。だが、神が女性に男性を誘惑するようにさせたものの、そのような女にならないよう自分の妻や娘に注意せよと警告をしている。このように考えると、旧約聖書外典・旧約聖書偽典・新約聖書外典においても、明確な化粧に対する否定・批判の記述はない。

8. 聖書における化粧の奨励

ここまで、キリスト教社会における化粧への否定・批判を過去のキリスト教聖職者など言葉から確認し、否定・批判の根拠として聖書の言葉を捜したが、ロバート・コドリントンがいうように「聖書のどこをみても化粧を罪としてことさらに禁じている道徳上の指示」の明確な言葉はみつからなかった。では逆に、化粧を奨励する言葉は聖書にはないのだろうか。

旧約聖書正典に「私は、野の若草のようにお前を栄えさせた。それでお前は、健やかに育ち、成熟して美しくなり、胸の形も整い、髪も伸びた。だがお前は裸のままであった。その後、私がお前の傍らを通ってお前を見たときには、お前は愛される年頃になっていた。そこで私は、衣の裾を広げてお前に掛け、裸を覆った（エゼキエル書16：7-8）」「私はお前を水で洗い、血を洗い落とし、油を塗った。そして、美しく織った服を着せ、上質の革靴を履かせ、亜麻布を頭に被らせ、絹の衣を掛けてやった。私はまた、装身具をお前につけ、腕には腕輪、首には首飾りをつけた。また、鼻に飾りの輪を、耳には耳輪を、頭には美しい冠を被らせた（エゼキエル書16：9-12）」とある。

また、旧約聖書外典に「女の美貌は顔を輝かせ、人がこれほどに慕い求めるものはない（ベンシラーの智慧36：27）」とある。

新約聖書正典には「断食をするとき、頭に油

をつけ、顔を洗いなさい。それは、あなたの断食が人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いて下さる（マタイによる福音書6：17-18）」とある。

『ベンシラーの智慧』では、女性の美貌が夫である男性を喜ばせ、美しくいることをよしとしている。しかしながら、ベンシラーの智慧は、自分の手におえないような美しい女性は、どんなにがんばっても手に入れることができない。ならば、最初からそのような女性とは関わらないほうがよいと忠告していたはずである。どうやら、手に入らない美しい女性は災いの種となるが、既に手に入っている女性であるならば、美しい方がよいということのようである。また、エゼキエル書における「私」とは神のことであり、「お前」とはエゼキエルのことである。神である私は、胸の形も整い、髪も長く伸び、成熟して美しくなったエゼキエルが裸であることに耐えられなかった。自分の似姿であるアダム、そしてイブが裸であること（創世記3：10-11）には気にする様子がなかった神が、なぜエゼキエルの裸に耐えられず、その裸を自らの手で覆ったのか。神の心境の変化を聖書から読み取ることにはできないものの、エゼキエルに油を塗り、美しい着物を着せ、美しい装飾品で着飾らせたのは誰でもない神自身なのである。しかしながら、神は大きな過ちを犯してしまったようである。「その美しさゆえに、お前の名は国々に広まった。私がお前を装わせた装いには、少しも欠けるところがなかったからである。それなのに、お前はその美しさを頼みとし、自分の名声のゆえに姦淫を行った（エゼキエル書16：14-15）」と。神は、美しいエゼキエルを自らの手でより美しくさせてしまったが故に、裏切られてしまった。あたかも、それは現代において若い女性に多額の貢物をしたのにも関わらず、

その女性を手に入れることのできなかった男性のようである。確かに、この点では人は神の似姿なのかもしれない。

また、新約聖書で「断食をするとき、頭に油をつけ、顔を洗いなさい。それは、あなたの断食が人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いて下さる」といったのは、イエスである。神の子であり救い主のイエスは、頭に油をつけ、顔を洗いなさいと化粧を勧めている。もちろんこの場合の化粧とは、装飾的な化粧ではなく身だしなみ・手入れとしての化粧であるが、イエスにより化粧が勧められている。中世の教会は入浴を禁じていたものの、これに反してイエスは修行（断食）を行っているときでさえ、「頭に油をつけ、顔を洗え」と化粧により美を保つことを勧めている。化粧を勧める記述は神の行為やイエスの言葉から確認することができる。

9. キリスト教社会が化粧否定・批判した理由

少ないながらも聖書には、化粧を勧めると認められる記述があるにもかかわらず、キリスト教社会では、化粧が否定・批判されている。化粧を一つの大罪であるかのごとく考え、自然のままであることを善であるという思想がキリスト教世界にはある。

聖書は、キリスト教社会における道徳観・世界観・歴史観・美術・科学など、様々なものに影響を与えている。そして、影響を与えるためには何よりもまず、その根拠が聖書に存在しなくてはならない。仮に、聖書に根拠がないような事柄であったとしても、聖書から発せられているようにしなければならない。ピシヨップ²⁸⁾は、キリスト教社会で性の罪とみなされていることの大部分が聖書とは関係がなく、ローマ帝

国末期のキリスト教聖職者たちによって発案されたものであり、彼らの生活を神学的議論により正当化するためであると指摘している。

化粧が聖書において明確な否定・批判の根源がないのにもかかわらず、多くの聖職者たちにより否定・批判されている理由を推察するには、先のピシヨップの指摘をふまえ、化粧を否定・批判したキリスト教聖職者たちの生活、特に性生活を考察しなければならない。

すなわち、中世の修道院は「子がはらみやすい」²⁹⁾ 場であり、男性修道士は「坊主を家に入れると、坊主は寝台にはいってくる」といった存在³⁰⁾ であり、女性修道士は「下半身は女郎、上半身は聖母」といった存在³¹⁾ であったという事実である。一般的には、キリスト教聖職者たちは禁欲的な生活を行っていたと想像する。しかしながら、キリスト教聖職者は禁欲的な苦行者ではなく、活発に性生活を行っていた³²⁾ のである。なぜなら彼らにとって純潔とは、妻帯しないということを目指し、独身者として犯す場合には罪にはならなかった³³⁾ からである。確かに、当時の聖職者たちは独身である。しかしそれは、性的な行為をしなかったということの意味しない。

キリスト教聖職者たちが修道院において独身生活を行っていたのは、聖書に独身であれと記述されているためではなく、たんに教会財産を聖職者たちによる共同財産として維持するために、血縁相続を避けるためであった³⁴⁾。すなわち、夫婦という婚姻形態をとまなわない性行為自体は、問題ではない。しかしながら、教義において明確な問題ではないにしろ、12世紀ごろからは、ある側面において性行為は規制される。すなわち、免罪符との関係である。免罪符の価格は、その犯した罪によって異なる。例えば、懺悔の秘密を洩らした聖職者は金貨7枚、高利貸しを行った者は金貨7枚、高利貸しの死体を教会に埋葬した者は金貨8枚であった³⁵⁾。そし

て、教会内で女性と性行為をもった者は、金貨6枚であった。免罪符は、それが教義や宗教儀礼として生まれたものではなく、教会が取り立てる税金として、教会が収入を得るために始まった事を考えると、実際に免罪符に規定されている行為がキリスト教において罪とみなされたのか疑問が残る。しかしながら、収入という点で考えるならば、免罪符に規定される行為は行われる可能性が高いということである。そして、他の罪に比べて、女性との性行為は金貨の枚数が少ない。このことは、教会内での性行為が一般的であったことや、他に比べ罪ととらえる認識が低かったことを意味しよう。いや、むしろ収入源を守るために性行為は厳しく禁じることができなかつたとも考えられる。

また、13世紀の神学者ドゥンス・スコトゥスは、精液はあまりに長いあいだ蓄えておくと毒になるので、過度の禁欲は害になる恐れがあると述べた³⁶⁾という。しかしながら、過度の禁欲が害となるのと同様、過度の性行為も害となったようである。ルネサンス期のローマ法王、アレクサンドロス6世やユリウス2世やレオ10世などは、活発な性生活により梅毒にかかっている³⁷⁾。特に、ユリウス2世は、梅毒のために足がつぶれ、受苦日の儀式としての法王の足への接吻をさせることができなかつたという。

しかし、だからといって、彼らは聖職者としての地位を利用し、ただ快樂に身を浸していたわけではない。肉欲的な生活を行いながらも、同時にそのことを悔い悩んでいたといわれる。とすれば、キリスト教聖職者は化粧により魅力的となった女性によって、性的欲求がかきたてられ性行為におよぶものの、その後、自らの性行為やそれともない感染してしまった梅毒を悔やんでいたのではないだろうか。そして、どうすれば梅毒にかからずにすむのか、どうすれば性的欲求が抑えられるのかという「性への自制・悔い」を考えた結果、一つの方法を思いつ

いたのではないか。すなわち、彼らは女性たちが魅力的にならなければ誘惑されることもないと結論し、女性が魅力的にならないためには化粧をしなければよいと考えたのではないか。それは、まさしく『十二族長の遺訓』や『ベンシラーの智慧』にみられる記述、そのものである。

キリスト教聖職者の言葉には、直接にこのことを意味するようなものはみられないものの、旧約聖書外典・旧約聖書偽典・新約聖書などで女性の美しさや誘惑が否定・批判されていることから、このような図式をとれば、キリスト教聖職者が化粧を否定・批判した理由を推察することができる。そして、化粧を否定・批判する根源として、「神がご自分にかたどって創造された（創世記1：27）」という聖句を引用することにより、人の姿そのものが既に神の似姿であるため、そのままでは美しく人工的に手を加えることは神への冒瀆であり、化粧をする必要がないという思想を形成し、キリスト教社会では化粧や化粧により美しくなることを否定・批判してきたのであろう。

いや、明確な根源がないにもかかわらず、化粧を否定・批判したということは、むしろ聖書学として化粧が議論された結果、否定・批判されたのではなく、聖職者の私的見解のうち記録に残ったものが、否定・批判であったのかもしれない。すなわち、聖書学においては、「三位一体」や「マリアの処女性」といった問題は大きに議論されていたものの、化粧についてローマ法王や教会などがその賛否について議論を行ったという記録をみることはできないからである。

10. まとめ

本研究では、聖書における化粧の記述を読み直すことにより、聖書世界の美粧、特について

考察した。その結果、聖書には化粧の明確な否定や批判は見当たらないものの、化粧を勧める記述は神の行為やイエスの言葉にあることがわかった。また、化粧への批判・否定は聖書に根拠をおくものではなく、キリスト教聖職者の性生活と深く結びついていることがわかった。

これまでみてきたキリスト教聖職者の主張には、疑問が残る。第一に、女性が男性を誘惑してしまうのは、他ならぬ神自身が、女性が男性を誘惑するようにさせた(創世記3:16)からであり、悪魔の仕業でもなく女性の仕業でもない。そして何よりも女性の男性を誘惑するほど美しさは、まさしく神の似姿であるが故である。とするならば、女性の美の姿を否定することは、神の姿を否定することにつながる。また、もし人工的に手を加えてはならないとする主張が神の意思であり、それが正しいのであれば、人は髪を切ることも顔を洗うこともしてはならないはずである。しかし、神から与えられた生命を維持するために人が食物を得るように、神から得た美を維持するために化粧を行うことも必要と考えられるからである。

『マタイによる福音書』におけるイエスの言葉は、そのことを表現しているのではないか。化粧を聖書において解釈する場合、キリスト教聖職者による論理により否定・批判するよりも、イエスの言葉を引用し、化粧を奨励した方が至当であると考えられる。

【謝 辞】

本研究に御指導御鞭撻くださいました佛教大学山崎高哉教授、国際日本文化研究センターテモテ・カーン助教授に深く感謝します。

【付 記】

本研究の一部は、日本顔学会フォーラム顔学2005(平成17年9月30日、株式会社国際電気通信基礎技術研究所(ATR))で報告された。

【参考・引用文献】

- 1) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.62
- 2) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.62
- 3) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.62
- 4) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.62
- 5) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.62
- 6) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.73
- 7) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.75
- 8) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.89
- 9) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.100
- 10) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.100
- 11) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.104
- 12) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.121
- 13) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.160
- 14) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.230
- 15) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.75
- 16) 石井美樹子(訳) 1999 ドミニクバケ:『美女の歴史』、創元社、p.35
- 17) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.93
- 18) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.149
- 19) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.162
- 20) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.176
- 21) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.342
- 22) ポーラ文化研究所(訳) 1982 リチャードコーソン:『メイクアップの歴史』、p.149
- 23) 共同訳実行委員会 1993 『聖書新共同訳』、日本聖書協会

- 24) Carson T. & Cerrito J. 2003 New Catholic Encyclopedia, Catholic University of America
- 25) 林秀一(訳) 1979 孔子:『孝経』、中国古典新書、明德出版社
- 26) 村岡崇光ら(訳) 1975-1977 聖書外典偽典(1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 補遺Ⅰ、補遺Ⅱ)、教文館
- 27) 矢川澄子(訳) 1983 オーヘンリー:『賢者の贈り物』、富山書房
- 28) 田中雅志(訳) 2000 クリフォードビショップ:『性と聖』、河出書房新社、p.143
- 29) 田中雅志(訳) 2000 クリフォードビショップ:『性と聖』、河出書房新社、p.65
- 30) 田中雅志(訳) 2000 クリフォードビショップ:『性と聖』、河出書房新社、p.63
- 31) 田中雅志(訳) 2000 クリフォードビショップ:『性と聖』、河出書房新社、p.44
- 32) 田中雅志(訳) 2000 クリフォードビショップ:『性と聖』、河出書房新社、p.148
- 33) 安田徳太郎(訳) 1972 フックス、『風俗の歴史』(3)、角川書店、p.40
- 34) 安田徳太郎(訳) 1972 フックス、『風俗の歴史』(3)、角川書店、p.22
- 35) 安田徳太郎(訳) 1972 フックス、『風俗の歴史』(3)、角川書店、p.33
- 36) 田中雅志(訳) 2000 クリフォードビショップ:『性と聖』、河出書房新社、p.73
- 37) 安田徳太郎(訳) 1972 フックス、『風俗の歴史』(3)、角川書店、p.52

